

第 3 章

表記のイロハ

英文の表記の基本

英訳の最初の一步は表記から。

それぞれ、目的や対象者に合わせて、「(表記の)スタイル編集方針」を決めるところから始めます。

対象者が英国の方なら、米国英語とは綴りが違うものも出てきます。

全体の不統一をなくし、きちんと伝わる訳語を目指しましょう。

毎年、整備が進んでいる観光庁のガイドライン*をベースに、

工芸分野ではどう方針を考えるべきか?海外目線で推奨したいことをまとめました。

*「地域観光資源の英語解説文作成のためのライティング・スタイルマニュアル(日本語版・英語版)」、以下「観光庁スタイルマニュアル」
<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/content/001473801.pdf>

Q1 ローマ字表記法は何を使う?

観光庁スタイルマニュアル

A ヘボン式を用いる

例)し: × si ○ shi

ち: × ti ○ chi

ヘボン式=ローマ字表記法のうち、最初かつ最も代表的なものです。戸籍や旅券パスポートもヘボン式が用いられます。

「ヘボン式ローマ字」による表記

50音表									
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ
wa	ra	ya	ma	ha	na	ta	sa	ka	a
ゐ	り	ー	み	ひ	に	ち	し	ぎ	い
i	ri	ー	mi	hi	ni	chi	shi	ki	i
ー	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う
ー	ru	yu	mu	fu	nu	tsu	su	ku	u
ゑ	れ	ー	め	へ	ね	て	せ	け	え
e	re	ー	me	he	ne	te	se	ke	e
を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お
o	ro	yo	mo	ho	no	to	so	ko	o
ん									
n (m)									

濁音・半濁音表				
ば	ぱ	だ	ざ	が
pi	bi	ji	ji	gi
び	び	ぢ	じ	ぎ
ぷ	ぶ	づ	ず	ぐ
べ	べ	で	ぜ	げ
pe	be	de	ze	ge
ぼ	ぼ	ど	ぞ	ご
po	bo	do	zo	go

拗音(ようおん)表										
びゃ	びゃ	じゃ	ぎゃ	りゃ	みゃ	ひゃ	にゃ	ちゃ	しゃ	きゃ
pya	bya	ja	gya	rya	mya	hya	nya	cha	sha	kya
びゅ	びゅ	じゅ	ぎゅ	りゅ	みゅ	ひゅ	にゅ	ちゅ	しゅ	きゅ
pyu	byu	ju	gyu	ryu	myu	hyu	nyu	chu	shu	kyu
びょ	びょ	じょ	ぎょ	りょ	みょ	ひょ	にょ	ちょ	しょ	きょ
pyo	byo	jo	gyo	ryo	myo	hyo	nyo	cho	sho	kyo

ヘボン式ローマ字表記へ変換する際の注意事項

※撥音:ヘボン式では**b・m・p** 前の「ん」は、**n**ではなく**m**で表記する

難波(なんば)→Namba、本間(ほんま)→Homma、三瓶(さんべい)→Sampei、本町(ほんまち)→Hommachi

※促音:子音を重ねて示す

服部(はっとり)→Hattori、薬局(やっきょく)→Yakkyoku

ただし、チ(chi)、チャ(cha)、チュ(chu)、チョ(cho)音に限り、その前に「t」を加える。

八町(はっちょう)→Hatcho

※長音:長音(-)に対するローマ字は不要。(前の母音で代用)

“オウ”、“オオ”はou、ooではなくoと表記

太郎(たろう)→Taro、大野(おおの)→Ono、大阪(おおさか)→Osaka、養蜂(ようほう)→Yoho

※その他「ウウ」の発音になる文字は「u」一文字で表す

日向(ひゅうが)→Hyuga

※間違いやすいヘボン式ローマ字

「し」→「shi」、「ち」→「chi」、「つ」→「tsu」、「ち」→「ji」、「づ」→「zu」、「じゅ」→「ju」、「じ」→「ji」、「ず」→「zu」、「しょ」→「sho」、
 「ちゅ」→「chu」、「ちょ」→「cho」、「ふ」→「fu」

「注意すべきこと」

ただし、現在よく使われている以下の表記は、改める必要がある

- × jyu → ○ ju
- × jyo → ○ jo
- × Ohtani (大谷) → ○ Ōtani
- × Meidi (明治) → ○ Meiji など

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

詳細は「観光庁スタイルマニュアル」P28を参照。

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/content/001473801.pdf>

Q2 工芸分野にマクロンは必要?

(マクロン=発音区別符号の一つで、長音記号とも呼ぶ。日本語の長音を表記する場合も、ヘボン式ローマ字に長音符マクロンを付加する方法が普及している)

観光庁スタイルマニュアル

マクロンは原則使用しない

長音符号は日本独自のもので、国際化されていないため、外国人に正しく理解されない可能性があります。ただし、区別がつかない単語の場合は母音字の上に「-(長音符号)」を付けて表します。

A 使えるのであれば「伝えるためには」使ったほうがいい

「マクロンは混乱を防ぎます」

マクロンを使用すべきです。狼はOhkami、OkamiではなくŌkamiがよいです

→マクロンは日本語の音をよく表し、ときに混乱を防ぐことができます。例えば、kobako (小箱)、kōbako (香箱) の違いなどです

→ただしTokyo (東京)、Kyoto (京都)、Kanto (関東) など、よく知られた地名などの名称には使いません

→人名の場合もNatsume SosekiではなくNatsume Sōseki (夏目漱石) とします

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「マクロン使用に賛成です」

→V&A 博物館では「Tokyo (東京)、Kyoto (京都)、Osaka (大阪) の場合にのみ、マクロンを使用しない」という規則に従っています。ですからKantō (関東)、Tōhoku (東北)、Kyūshū (九州) にはマクロンを使用します

→英語の辞書に掲載されるなど英語の一部になり、イタリック体で表記する必要のない日本語表記にはマクロンを使用します。例えば、Shintō (神道)、Shōgun (将軍) などです

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「使うのが理想ですが、使用が現実的ではない場合もあります」

マクロン使用表記は、元の日本語をより正確に反映するため、日本語が理解できる専門家に好まれます。マクロンがあると情報量が増え、より正確な翻字になります

ただし、編集の作業量が大幅に増えるという理由で、一般向けの出版物やネット上の記事では、マクロンはあまり使われません。観光向けの印刷物などについては、マクロンの使用は現実的ではない場合が多くみられます

なお、言語の傾向として、日本語の言葉が外来語として英語に定着すると、マクロンを廃止する例がほとんどです

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

Q3 時代の表記は?

明治時代はera? period?

A 初出の際に、時代または元号の後に、括弧で西暦を表記する。

- 例) 江戸時代 ○ Edo period (1603–1867)
 × Edo period
 × Mid-Edo period
 × Edo period, 18th century
 × Edo period, eighteenth century

〈参考〉

Period: 縄文や弥生のように時代の始まりと終わりがゆるやかな時代区分を指す。
 時代の期間が終わってから、後世に名付けられる。(Jōmon, Yayoi, など)

Era: 政権や元号などによって始まりと終わりの明確な時代区分を指す。(Meiji, Heisei, など)

「日付範囲は全角ダッシュ『—』ではなく、enダッシュ『-』を使用」(▶p.36)
 →全角「—」「～」は間違いで、「-」でEdo period (1603–1867)。

「文化年号を併記しないように」

→「天平文化」「北山文化」といわれても海外の人にはわかりません。

同時に二つの年号を使用すると混乱を招くので、非常によくありません。物事をシンプルにしておくことが重要です

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「明治以降はera (時代) を使います」

→period (元号=歴史的期間)とera (時代)は、使い分ける必要があります。periodは「後世の歴史家によって発案されたもの」で、eraは「(令和のように) 事前に設定されたもの」です。ですので、私は明治以降はeraを使用します

例) Meiji era (1868–1912)、Taishō era (1912–1926)

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「明治以降はperiod (歴史的期間) を使います」

→V&A美術館は、いまのところ、明治、大正、昭和、平成、そして令和にはperiod (元号=歴史的期間)を使い続けています。そして明治時代以前の、例えばGenroku era (元禄時代)の表記に、era (時代)を使用します。

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

※明治についてはeraを慣習的に使ってきたためperiodとeraの両方の使用が見られます。

※「Genshi」「Kodai」「Chusei」「Kinsei」「Kindai」「Gendai」は、日本語をただローマ字表記にしているだけ、推奨はできません。

Q4 ハイフンはどう使う?

観光庁スタイルマニュアル

- ① 地名に「東西南北」「上中下」「新旧」などがつく場合はハイフンを用いる
- ② 発音の便宜上、必要な場合は区切るために入れる
- ③ 人名には使わない

- 例) 西吾妻山 ○Mt. Nishi-Azuma ①
 観音寺市 ○Kanon-ji City ②
 阿寒摩周 ○Akan-mashu ②
 天照大神 ○Amaterasu Omikami ③
 × Amaterasu-Omikami
 伊邪那岐神 ○Izanagi no Mikoto ③
 × Izanagi-no-Mikoto

A 世界的にハイフンを嫌う流れも出始めていて、ネイティブスピーカーの中でも熱い議論が生まれている。下記の意見を参考に。

「ローマ字表記はハイフンを避ける」

日本語名のローマ字表記には、ハイフンは可能な限り避けた方がよいと考えます (V&A 博物館での考え方)

[Rupert Faulkner | ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター]

「まずは辞書で確認！」

まずは、辞書を見ましょう。New Oxford Style Manual (2012) pp.395–820 が基本ルールです
→ただし、時と場合によるため、ネイティブ・スピーカーにとっても、かなり複雑な問題です
→Kanon-ji は×だと思います。Kanonji か Kan'onji です。「'」を入れることで、「かんのんじ」との誤読を防ぎます
→「山」の表記に略称の Mt. を使うのは避けるべきです。安っぽく見えます。Mount がいいでしょう

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ポストン美術館東洋部主任部長]

Mt. は正規の略語であり、表記場所によって、むしろ Mt. にすべきこともあります (道路表記など)。
かたい文章では Mount と書くのが普通ですが、さまざまな場面において Mt. も一般的な書き方といえるでしょう

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

Q5 イタリック体 (斜体) はどう使うか

A 異なる階層の言葉はイタリック体にするが、固有名詞は正体

工芸の言葉は、「地域名称」「素材名称」「技法名称」と日本語にしかない言葉が多く登場し、そのうち、何を一般名詞、固有名詞と捉えるか、各自のスタイルに委ねられます。

[Japan Style sheet] [Chicago Manual of Style] を参照した上で各自のスタイルの方針を決定するとよいでしょう。

「イタリック体の考え方」

1. 英語に組み入れられた外国語であることを示す
2. 作品の題名
3. 強調するため。なお、引用符により強調する際はイタリック体にせず、正体を引用符で囲む
4. 出版物・作品名以外の固有名詞はイタリックにしない

例) *fusuma panels*

→しかし、すでに辞書に掲載されるなど、英単語として定着したものは正体

例) ○ sushi (寿司) ○ shogun (将軍) ○ noren (暖簾)

作品名や対訳のない日本由来の単語・用語もイタリック体

例) × Kojiki ○ *Kojiki* (古事記)

出版物に満たない作品名 (詩の題名など) は、イタリック体ではなく引用符で表記するのが一般的です

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

観光庁スタイルマニュアル

俳句や詩は、日本語の読み表記をイタリック体にし、英語訳を併記

詳細は「観光庁スタイルマニュアル」P34 参照。

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/content/001473801.pdf>

日本にしかない 独自の工芸の素材や技名はどう訳す？

植物名(ヒノキ、松、紅花など)の訳しかた

英語の一般名のないものは、日本語のローマ字表記をイタリック体で示し、学名を括弧でイタリック体に。

例) ○ *Meakan kinbai* (*Sibbaldia miyabei*) (雌阿寒金梅 メアカンキンバイ)

「日本語のローマ字表記もイタリック体に」

日本語のローマ字表記も、学名(ラテン語)もイタリック体です

例) *Meakan kinbai* (*Sibbaldia miyabei*)

学名(ラテン語)は二つのパートに分けられますが、二つ目の“*miyabei*”の部分が、人名から派生する場合でも、大文字にしないのがルールです

例) *Chaenomeles japonica*, *Hosta sieboldiana*

[Joe Earle | ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ボストン美術館東洋部主任部長]

「英語の名称(一般名)があるものに関してはイタリック体にしません」

なお、学名表記は専門家向けの資料以外では省略するのが一般的です

[Zackary Kaplan | 翻訳者]

参考資料

英語テキストの中の日本語(ローマ字表記)の扱い方

訳せるものはできる限り訳すことが基本ですが、日本語の単語をそのままローマ字表記したものをみかけることがあります。効果的に使用されればよいのですが、不注意な使い方をすると読者の集中が削がれてしまうばかりか読む気にならなくなってしまいます。では、どこに気をつければ効果的な使い方ができるのでしょうか？

詳細は「観光庁スタイルマニュアル」P30 参照。

<https://www.mlit.go.jp/kankoch/shisaku/kankochi/content/001473801.pdf>

ローマ字表記の三つのパターン

その日本語の単語を知ることが読者の日本理解に結びつく場合

1. () 内の (*hikite*) はスルーしても読み進められる。興味のある人は覚えればよい

- The building is known for the ingenious designs of the finger-holds (*hikite*) on the *fusuma* and other interior partitions.

2. まずローマ字の日本語で呈示して、続けて英語でその意味を説明する

- The building's southeastern portico is decorated with a *shimenawa*, a large straw rope marking the boundary between sacred and profane space.

3. 英語だけだと漠然としてしまう場合、ローマ字の日本語を入れることで特定性をもたせる

- local religious experts (*hoshi*) who traveled around Japan preaching...

ローマ字表記が効果的な場合

日本文化に根ざした(文学や絵画のモチーフになるような)植物など。観光スポットで知っておくと役に立ちそうな場合

例)

- *Mizubasho* (swamp lanterns; *Lysichiton camtschatcensis*) and fawn lilies (*katakuri*) bloom along the course.

▶ 日本文学で馴染み深いモチーフは主語として扱うことで「みずばしょう」という日本語を知ってもらう。英語の説明

は、続く()内で行う

▶ 英語でも通るような花名の場合は、()内にローマ字の日本語を入れる

英語には対応する言葉がなく、英語だけで説明しようとすると複雑で長くなりそうな概念、事物など

例)

- The room has a *kotatsu* (a table equipped with a heating device) and *yukimi shoji* (shoji panels with vertically sliding sections)

▶ 日本語のローマ字表記+(英語の説明)とすることで、日本語の単語が強調される

- a *shimenawa*, a large straw rope marking the boundary between sacred and profane space.

▶ 長めに説明したい場合は、日本語のローマ字表記のあとをカンマで区切る

日本の観光案内においては、しばしば植物や自然の地名、俳句や詩の一節が登場します。その場合、日本語はどのように扱うのがよいでしょうか。

1. 植物名

文脈の中でどのように表記すればいいかを判断することが必要。

1) 簡単に伝わるのであれば英語名のみ。植物そのものについての情報がさほど必要でない場合は、過剰な説明は不要

例)

×: The statue is made of Japanese cypress (*hinoki*); the *fusuma* panels are covered with designs of iris (*kakitsubata*; *Iris laevigata*); the chest is made of paulownia wood (*kiri*; *Paulownia tomentosa*).

○: The statue is made of cypress; the *fusuma* panels are covered with designs of iris, and the chest is made of paulownia wood.

2) 観光客の理解の助けに必要と思われる場合は、英語名+(日本語名/ラテン語名)

※ラテン語名はイタリック体にし、最初の頭文字を大文字にする

例)

- rabbit-ear iris (*kakitsubata*; *Iris laevigata*)

- paulownia (*kiri*; *Paulownia tomentosa*)

3) 英語名が(一般的な英語の辞書に)見当たらない場合や、日本語の名称を使用したほうがよい場合は

日本語名+(英語名/ラテン語)

※日本語名はイタリック体にする

※ラテン語名はイタリック体にし、最初の頭文字を大文字にする

例)

榊: *sakaki plant (Cleyera japonica)*

ドウダンツツジ: *dodan-tsutsuji (white enkianthus; Enkianthus perulatus)*

※ 英語名に地名が含まれている場合は、その地名の頭文字を大文字で表記する。

白山芍薬: **Hakusan** *rhododendron*

▶ 表1 参照

2. 自然地名

北半球の地形の分類には共通性があり、よって日本語に対応する英語が存在する。訪日外国人旅行者が理解しやすく呼びやすい英語の自然地名にすることが大前提。

原則として、自然地名の英語表記は

地名部分(日本語のローマ字表記)+地形部分(英語)

※山、湖などは順序が逆

例) 荒川: **Ara** River

筑波山: **Mt. Tsukuba** (山にはMountではなくMt.を使う)

等々力渓谷: **Todoroki** Ravine

石見高原: **Iwami** Highland

奥羽山脈: **Ou** Mountain Range ないし **Ou** mountain range

白糠丘陵: **Shiranuka** Hills

関東平野: **Kanto** Plain

• 山(岳)

Mt. + 地名部分(日本語のローマ字表記)

「~山」は、普通は「富士山」の「富士」部分を地名部分として、**Mt. Fuji**とするが、大山や飯山の場合は、**Mt. Daisen**, **Mt. Iiyama**となる。

「~岳」(~タケ、~ダケ)の場合は、**-take**, **-dake**を含めて地名にしているケースが多い。

例) 権現岳: **Mt. Gongendake**

父ヶ岳: **Mt. Tetegatake**

表1 日本語名+(英語名、ラテン語)の植物の例

植物名	推奨される表記
葵 <i>aoi (futaba aoi)</i>	wild ginger ないし Japanese wild ginger (×hollyhock [立葵])
银杏 <i>Icho (中国語 yinxing)</i>	ginkgo (ginkgo よりもよい)
水芭蕉 <i>mizubasho</i>	<i>mizubasho</i> (swamp lantern; <i>Lysichiton camtschatcensis Schott</i>)
女郎花 <i>ominaeshi</i>	<i>ominaeshi</i> (maidenflower; <i>Patrinia scabiosifolia</i>) ないし patrinia (<i>Patrinia scabiosifolia</i>)
すすき <i>susuki</i>	silvergrass ないし miscanthus grass (<i>susuki</i>) ないし eulalia grass (<i>Miscanthus sinensis</i>) (×pampas grass は別の植物)

※その他主要植物に関しては、Appendix 2「植物名」参照

• 島

地名部分 (日本語のローマ字表記) + **Island**

「～シマ」は、「シマ」を地名に含めないケースと含めるケースの両方がある。

例) 福江島: Fukue Island

黒島: Kuroshima Island

• その他

秋吉台 Akiyoshidai Plateau の -dai は plateau を意味し、尾瀬ヶ原 Ozegahara Marsh の -hara には marsh (湿原) の意味がすでに含まれているため重複している。しかし地域関係者にとって “Akiyoshi Plain”、“Oze Marsh” では耳慣れず違和感がある。

定訳がまだ固まっていないものについては、そのつど関係者と協議しながら調整する。

3. 詩

和歌や俳句を解説文に組み入れる場合は、日本語の部分 (日本語のローマ字表記) をイタリック体にし、英語訳を併記する。

必要な区切りで行替えを行う。

▶ 原稿段階では、詩や俳句・和歌は次のように記載しておくのがよい:

natsukusa ya

tsuwamono domo ga

yume no ato

The summer grasses—

For many brave warriors

The aftermath of dreams

SWET (Society of Writers, Editors, and Translators) に学ぶ

使用するフォントとハイフンについての「6つのルール」

英文を案内版やウェブページで表示する際に、編集やデザイン、その業務の担当者が忘れてはならない「英文表記の6つのルール」をSWET (▶p.41) がまとめています。

基本的な約束事を無視した英文を読んだ人は、見た目の不自然さや拙さに気が向いてしまい、肝心の伝えるべき内容がスムーズに頭に入ってこない場合があります。そうならないための6つのルールを紹介します。これらのルールは、*Chicago Manual of Style*、*Japan Style Sheet*、*JTA Writing and Style Manual*等に共通している標準的なフォーマットです。

詳細はSWET「英文表記、忘れてはならない『6つのルール』」参照。

https://swet.jp/columns/article/Eibun_hyoki_wasurete_wa_naranai_mutsu_no_ruru/_C35

1. 英文には和文フォントを用いない

英文テキストは、すべて1バイトの単位で作成されています。一方、和文フォントは2バイト単位で作成され、欧文フォントとは構造が異なります。

そのため、英文(1バイト)を和文フォント(2バイト)で表示したときに、表記上の間違いが生じたり見栄えが悪くなったりするばかりか、文として意味をなさなくなることすらあるのです。

特に注意したいのは、欧文フォントで書かれた英文テキストを和文フォントのテキスト内にコピー&ペーストするケースです。その際、引用符(“ ”)、アポストロフィー(’), ダッシュ(—)等が全角記号に誤変換されることがしばしば起きます。読み手は、誤った記号の使われ方をした文を目にして、内容以前に大きな違和感を抱くでしょう。

(○) 欧文フォントの正しい句読記号

例: Times New Roman

"For if it is rash to walk into a lion's den unarmed, rash to navigate the Atlantic in a rowing boat, rash to stand on one foot on top of St. Paul's, it is still more rash to go home alone with a poet." (Virginia Woolf, *Orlando*)

(×) 和文フォントの誤った句読記号

例: Yu Mincho

"For if it is rash to walk into a lion's den unarmed, rash to navigate the Atlantic in a rowing boat, rash to stand on one foot on top of St. Paul's, it is still more rash to go home alone with a poet." (Virginia Woolf, *Orlando*)

2. 適切なフォントを選択する

欧文フォントには、セリフ(ひげ付き)フォントとサンセリフ(ひげなし)フォントの2種類が存在します。案内板の場合は読みやすいセリフ・フォントがよいでしょう。

下表にあげたのはよく使われる欧文フォントです。左列のセリフ・フォントの使用を推奨します。

セリフ (Serif)	サンセリフ (San-serif)	使用しない (非推奨)
Times New Roman	Arial	Osaka
Century	Verdana	ヒラギノ明朝
Garamond	Helvetica	游明朝
Bodoni	Futura	小塚明朝
Book Antiqua	Optima	MS 明朝
Baskerville	Tahoma	

3. 文字揃えを「両端揃え」にしない

英文テキストでは、行は「左揃え」にして、単語間には半角スペースを入れるのが一般的です。書式設定で行を「両端揃え」の設定にすると、単語と単語の間がひらきすぎて読みにくくなり、ページの見た目も悪くなるので避けましょう。

(○) 左揃えフォーマット

“The habitual use of the active voice makes for forcible writing. This is true not only in narrative principally concerned with action, but in writing of any kind. Many a tame sentence of description or exposition can be made lively and emphatic by substituting a verb in the active voice for some such perfunctory expression as there is, or could be heard.” (William Strunk, *The Elements of Style*)

(×) 両端揃えフォーマット

“The habitual use of the active voice makes for forcible writing. This is true not only in narrative principally concerned with action, but in writing of any kind. Many a tame sentence of description or exposition can be made lively and emphatic by substituting a verb in the active voice for some such perfunctory expression as there is, or could be heard.” (William Strunk, *The Elements of Style*)

4. コピー＆ペーストによるフォーマットの消失に注意

テキストのコピー＆ペーストをする際に、イタリック体、太字、下線等、修飾したフォーマットが失われることがよく起こります。注意深くチェックしましょう。イタリック体は、時に異音語であるというサインとして用いられます。イタリック体で書かれた単語は日本語の音をそのまま表し(ローマ字読み)、それが日本語であることを意味するのです。しかし、コピー＆ペーストすることによって、イタリック体が普通の字体(ローマン体)に戻ってしまうと、英語の言葉として認識されます。これは混乱や誤解の原因となります。たとえば、*shine* (イタリック体=日本語で「死ぬ」)のつもりが、**shine** (ローマン体=英語で「輝く(シャイン)」)に、同様に *same* は「鮫」のはずですが、**same** 「同じ(セイム)」と認識されます。

5. ハイフン、enダッシュ、emダッシュ、3種それぞれの機能と長さ

日本語にはない記号です。長さによって意味が全く異なるため、特に注意が必要です。

ハイフン 語と語をつないで「複合語にする」最も短い横線(例:singer-songwriter)です。

enダッシュ(en-dash) 何頁から何頁、何年から何年までという、「範囲を表す」場合(例:pp. 24–31; 1914–1918)に使う、大文字のNの横幅分の長さの文字です。

emダッシュ(em-dash) 「別の情報」—例えばこのような—を挿入するときに使う、大文字のMの横幅分の長さの文字です。

日本語フォント内にコピー＆ペーストをすると、これらのハイフンやダッシュの文字が不適切なものに化けて意味が変わってしまうことがしばしば起きます。

記号	英文フォント 例) Times New Roman / R (○)	日本語フォント 例) 小塚明朝 / R (×)
ハイフン	-	-
エンダッシュ	—	-
エムダッシュ	—	-

6. 適切な段落表示

案内板や印刷物では、小見出し後の最初の行の文頭はインデント(字下げ)なし、その後の段落は文頭にすべてインデントを設けます。インデントの幅が大きすぎても小さすぎても違和感を与えるため、正規の英文出版物を参照して適切な幅に調整します。ウェブサイト、QRコード・テキスト等、ネット上の文章については、段落が変わるところで行を空けます。アキを1行以上設け、段落の区別が一目瞭然となるようにします。

案内板と印刷物の適正な段落スタイル

Lorem Ipsum

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

Duis aute irure dolor in reprehenderit in voluptate velit esse cillum dolore eu fugiat nulla pariatur. Excepteur

sint occaecat cupidatat non proident, sunt in culpa qui officia deserunt mollit anim id est laborum.

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

ウェブサイト、QRコード・テキスト等、デジタル・テキストの段落スタイル

Lorem Ipsum

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

Duis aute irure dolor in reprehenderit in voluptate velit esse cillum dolore eu fugiat nulla pariatur. Excepteur sint occaecat cupidatat non proident, sunt in culpa qui officia deserunt mollit anim id est laborum.

Lorem ipsum dolor sit amet, consectetur adipiscing elit, sed do eiusmod tempor incididunt ut labore et dolore magna aliqua. Ut enim ad minim veniam, quis nostrud exercitation ullamco laboris nisi ut aliquip ex ea commodo consequat.

6つのチェックリスト

1. 適切な欧文フォントを用いているか
2. 行は左揃えになっているか
3. 元の原稿のフォーマット（イタリック体など）は、最終テキストに漏れなく反映されているか
4. 引用符、コンマ、コロンのアポストロフィーは半角で表示されているか
5. ハイフン、**en**ダッシュ、**em**ダッシュが正しい長さになっているか
6. 案内板、印刷物の段落のインデントは適正か

SWET (Society of Writers, Editors, and Translators) に学ぶ 「すべて大文字」で表記の問題

日本では英文の表記ルールを学ぶ機会がほとんどなく、そもそもそのルールがあるということを知らないために引き起こされ、英文編集者・翻訳者を悩ます問題があります。そのなかの一つが、大文字表記です。

一つの単語をすべて大文字で表記する。これが英語圏において非常識であることは、日本では知られていません。執筆者、編集者、デザイナーは、日本語の書体を見た目や好みで選択するのと同程度のことと認識し、特にタイトルやリードをすべて大文字にしてしまうことがよく見られます。

すべて大文字で表記することが何を意味しているかを、SWET (▶p.41) がまとめています。

詳細はSWET「英文中の All Caps (全大文字表記) の問題」を参照。

https://swet.jp/columns/article/all_caps_a_practical_guide_j_2/_C38

英文テキストで、すべて大文字を使って表記するのは、基本としては次の三つの場合のみです。

- 1 頭文字だけを取った略語 (例: MIT; BBC 等)
- 2 「叫ぶ」(shouting) ニュアンスを出したい場合
 - ・全文大文字で書かれたメール → 受け取った側は、大声で怒鳴られているような気分になります。
 - ・Twitterにおけるすべて大文字の眩き → 喚き散らしている、と受け取られます。
- 3 伝統的に使われてきたもの (例: 公文書、法的契約文書)

固有名詞の表記

英文テキストにおける固有名詞の表記: 「頭文字のみ大文字、ほかは小文字」が原則です。

例) Tanaka; Mississippi; Mt. Fuji

例外) 頭文字の固有名詞は全部大文字

MIT (Massachusetts Institute of Technology)

BBC (British Broadcasting Corporation)

組織名・会社名の全大文字表記について

・商標や看板における表記については、全大文字表記 (SONY、TOYOTA など) でも OK。

・しかし、テキスト (文章) 中では、Sony、Toyota とすべきです。

注意: 自分の社名・商品名をすべて大文字表記にするかどうかは、会社の権限として自由に決められますが、

外部の出版物などのメディアで全大文字表記にするかしないかの選択権は、制作する出版社・コンテンツ側にあります。

ロゴとテキスト表記

会社名、トレードマーク名、商品名はすべて大文字でも頭文字だけ大文字でも、全部小文字でも OK です。

ただし、それはあくまで「デザイン」の領域であり、「テキストにおける、英文の表記ルールに適った英文名」とは別の問題です。

テキスト中では、単なる名称として英文の表記ルール (基本は頭文字のみ大文字) に準じる必要があります。

注意: 長い会社名を英文テキストの中ですべて大文字で表記すると、英語圏では非常に見苦しいと受け取られます。

苗字をすべて大文字表記にする

Ichiro Tanaka; Tanaka Ichiro ▶ どちらが苗字かわかりにくい

そのため、

TANAKA Ichiro のように、苗字に対しすべて大文字を使うことを決めている学術雑誌や組織もあります。

国際会議での多くの国籍の参加者のリストやネームタグでは、苗字をすべて大文字で書くのは大変理にかなっていません。(ただし、この表記もテキストの中では通用しません)



なお、日本からの英文発信(観光分野、美術館・博物館、学術、一般書籍)に長年携わってきた組織の主要なスタイル・ガイド(*Japan Style Sheet*, *JTA Writing and Style Manual*, *Monumenta Nipponica Style Sheet*や*NICH Style Manual for English Texts*)では、苗字の全大文字表記は避けるべきとしています。

注意:全大文字スタイルで書かれた苗字が何回も出てくるテキストは、読者に以下のような印象を与えています。

- ・見栄えが悪い
- ・「叫んでいる」印象を与えてしまう
- ・趣味がよくない
- ・英文テキストの中では不自然に見える
- ・読者に不親切
- ・本の性格に合っていない

まとめ

文章作成の上で留意したい点

読んでほしい相手(英語圏の、英語を日常的に使っている人たち)が違和感を覚えなくてスムーズに読めるようにすること。読者の神経を逆なでしないタイトルやテキストをつくっていくには、英文表記のルールをよく理解し、ルールに則ることを忘れないようにしましょう。

第 4 章

和英翻訳の心構えと 参考にしたいサイト

おさえておきたい、和英翻訳のポイント

Lynne E. Riggs [CIC 人文社会科学翻訳センター、Society of Writers, Editors, and Translators]

和英翻訳のクオリティを確かなものにするために欠かせない心得、基本ルール、マニュアルなどをまとめました。

和英翻訳プロジェクトで後悔しないための心得

1. 「ネイティブ」だからといって、素人には和英翻訳も編集もできません。
最初からプロの翻訳者、編集者に依頼することが大切です。
(機械翻訳は論外。AIには言葉の意味を理解する能力はありません)
2. 翻訳料を低く抑えようとするより、「精度の高い翻訳」に対する適正な対価を払って、日本の和英翻訳能力を維持していくという意識を持ちましょう。
3. 翻訳者の人選は、その方面に精通した信頼できる人に推薦してもらうのがよいでしょう。
(言語能力、ジャンルに対する適性など、総合的な判断が必要です)
4. 初めて依頼する翻訳者の場合、その翻訳者が過去に訳した事例を事前に確認し、正式に依頼するかどうかの判断材料としましょう。(下記の3つの判断基準を参考に)
5. どんなに優秀な翻訳者でも、どうしても不十分なところが出てきます。
それを補うチェッカーとのよい協力関係を築きましょう。

和英翻訳の良否を判断する基準

1. 読みやすく、自然な英語になっているかどうか。
和英翻訳では、英和翻訳とは事情が異なり、読みにくい「直訳体」は許されません。
2. 日本語の論理が、英語の論理にうまく変換されているかどうか。
word for word の翻訳になっているものは、総じて「赤信号」と認識しましょう。
3. ファクトの部分の処理が適切かどうか。
人物、年代、日本的物などをどう処理しているかを拾って見ていくと、翻訳の精度が効率的に判断できます。

英語表記に関する、基本的なルール集

基本的な表記法については、以下を参照した上で、英文作成することをおすすめします。
英訳者に依頼をする際、原稿や参考文献とともにこのマニュアルを渡していきましょう。

1. SWET (Society of Writers, Editors, and Translators) 編

Japan Style Sheet, 3rd Edition:

<https://japanstylesheet.com/wp-content/uploads/2022/08/>

JapanStyleSheet_3rdEdition_SWET_2022.pdf

日本在住の英語を母語とするプロのライター、編集者、翻訳者が40年にわたる経験を蓄積したなかで編纂されたマニュアルです。

〈主な内容〉

日本語の音を表記する

ローマ字表記／長い母音（マクロン、重複など）／NとM／アポストロフィ／ハイフン

表記の方法

イタリック／固有名詞（個人名、名前の順序、姓名の順序：個人名、明治以前、作品名など）／地名／大文字／複数形／
外来語／英文中の漢字／引用／情報（タイトル、出版社名、著者名）

付録（ヘボン式ローマ字、県名、単位、元号、時代など）

2. 観光庁編（2023年2月）

地域観光資源の英語解説文作成のためのライティング・スタイルマニュアル：

<https://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kankochi/content/001473801.pdf>

インバウンドなど訪日外国人の増加に対応すべく、SWETのメンバーも参画しまとめたものです。

日本の観光地について効果的な英語解説文を制作する制作会社（ライターおよびエディター）のためのマニュアルです。

〈主な内容〉

第1部： 英語の解説文制作の進め方

重要ポイント／英語の解説文制作ステップ／媒体の種類と特徴

第2部： スタイルガイドライン

英語語彙表記の規準／段落仕様／日本語のローマ字表記／英語テキスト中の日本語の使用規準／イタリック体／
句読記号／人名、その他の固有名詞／大文字／時代と年代／数／金額／単位／時刻・時間／その他の注意事項／
注意すべき頻出単語／ローマ字表／神社仏閣／日本史の時代名／植物名／動物名／食・食文化／英文表記：忘れ
てはならない「6つのルール」

これまでに発行された「工芸英訳ガイドライン」シリーズ

「工芸」英訳ガイドライン

工芸を伝える際に、気をつけたいポイント

● 2018年発行

https://thecreationofjapan.or.jp/download/kogei_translation_guideline_2.pdf

工芸の用語を英訳するにあたり、「これが正しい」を示すのではなく、

「この言葉では伝わっていない可能性が高い」ものと、その理由を挙げています。

海外へ日本文化を紹介する多くの方々、美術館、博物館、工芸を展示する施設、シ
ョップや美術商、商社全般、つくり手に向けたガイドラインです。

〈主な内容〉

日本特有の技や素材をどう訳すか／「〇〇焼」「〇〇塗」をどう訳すか 地域の特産品の工芸／「私は〇〇家（師）です」
をどう訳すか 職業を英語で称する／作品名、作者名、時代、所蔵の表し方／発音記号（ハイフン、マクロン）の使い方／
「工芸」をどう伝えるか Kogeiと Craft／これは伝わらない／これなら伝わる工芸用語の英訳例

かなざわ工芸英訳ガイドライン 加賀象嵌編

工程と重要語句を、日英の言葉で解説

● 2021年発行

https://www.kanazawacraft.jp/sys/wp-content/uploads/2022/04/N1000084_001.pdf

「金工」分野のひとつ「加賀象嵌」にまつわる言葉の事例を検証、ふさわしい英訳用語を紹介し、
その理由を説いた英訳ガイドラインです。工芸作家や職人、販売者、通訳者、翻訳者を対象とし、
観光やビジネスなど海外に向けたさまざまな場面を想定しています。

〈主な内容〉

加賀象嵌とは／加賀象嵌の作り方・工程／象嵌用語の手引き／訳語例一覧

本ガイドラインは、ロンドンにおける二つのシンポジウムと、
P42に記載した二つのスタイルマニュアルを参考ならびに、一部転載いたしました。

シンポジウム

Japanese Crafts and the Challenge of Translation 「工芸英訳ガイドライン」

於 ロンドン大和日英基金
日時 2019年5月9日
内容 I. プレゼンテーション ジョー・アール氏
II. プレゼンテーション 井谷善恵氏
III. ディスカッション 渡辺俊夫氏
主催 大和日英基金、一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン
助成 グレイトブリテン・ササカワ財団
協力 佐賀県

登壇者

Joe Earle (ジョー・アール) 氏

ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、
元ポストン美術館東洋部主任部長

井谷善恵氏

東京藝術大学グローバルサポートセンター 特任教授

渡辺俊夫氏

ロンドン芸術大学、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン教授、
トランスナショナル・アート 研究所所長



シンポジウム

Crafting Shared Understanding: Japanese-to-English Translation Guidelines for Craft 工芸英訳のための共通ルールづくりに向けて

於 ジャパン・ハウス ロンドン
日時 2019年5月10日
主催 ジャパン・ハウス ロンドン、一般社団法人ザ・クリエイション・オブ・ジャパン
助成 グレイトブリテン・ササカワ財団、東京倶楽部
協力 ANA, Asahi UK, Sake Samurai

登壇者

Joe Earle (ジョー・アール) 氏

ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、
元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、元ポストン美術館東洋部主任部長

Rupert Faulkner (ルパート・フォークナー) 氏

ヴィクトリア&アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター

西田宏子氏

根津美術館顧問

Tanya Szrajber (ターニャ・シュライバー) 氏

大英博物館 データベースおよび単語の記録保存部門の前責任者

坂井基樹

編集者、ザ・クリエイション・オブ・ジャパン常務理事

ファシリテーター

Simon Wright (サイモン・ライト) 氏

ジャパン・ハウス ロンドン企画局長

※ 肩書きは開催時のものです



ロンドンクラフトウィーク2019 参加イベント

協力	井谷善恵	東京藝術大学グローバルサポートセンター 特任教授
	Simon Wright (サイモン・ライト)	ジャパン・ハウス ロンドン企画局長
	Zackary Kaplan (ザッカーリー・カプラン)	翻訳者
	Joe Earle (ジョー・アール)	ボナムズ日本美術部門シニア・コンサルタント、 元ジャパン・ソサエティ・ギャラリー (NY) ディレクター、 元ボストン美術館東洋部主任部長
	Tanya Szrajber (ターニャ・シュライバー)	大英博物館 データベースおよび単語の記録保存部門の前責任者
	西田宏子	根津美術館顧問
	Lynne E. Riggs (リン・リッグズ)	CIC 人文科学翻訳センター、Society of Writers, Editors, and Translators
	Rupert Faulkner (ルパート・フォークナー)	ヴィクトリア & アルバート博物館 日本美術部門シニア・キュレーター
	渡辺俊夫	ロンドン芸術大学、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン教授、 トランスナショナル・アート 研究所所長
	グレートブリテン・ササカワ財団	
	湖山医療福祉グループ	
	佐賀県	
	ジャパン・ハウス ロンドン	
	大和日英基金	
東京倶楽部		

編集 一般社団法人 ザ・クリエイション・オブ・ジャパン 〒104-0061 東京都中央区銀座5-3-12 壹番館ビル3階 <https://thecreationofjapan.or.jp>

編集協力 永峰美佳

翻訳 福永 愛、尾原美保、翻訳ユレイタス

この記録は、グレートブリテン・ササカワ財団、湖山医療福祉グループの助成を受けて作成されたものです。

